松本高等学校山岳部の伝書鳩

田　中　圭　美　（信州大学 大学史資料センター）

１．はじめに

信州大学の前身校の一つである旧制松本高等学校（以下、松本高等学校）には、開学翌年の1920（大正9）年に山岳部（以下、松高山岳部）が創設され、当時の登山ブームもあり全国各地から山好きの学生が集まってきた。

松高山岳部の初代部長を務めたのは、同校の講師をしていた矢澤米三郎（以下、矢澤）であった。矢澤は、信州大学の前身校の一つである長野県松本女子師範学校の初代校長を務めた人物であり、同時に信濃山岳会長も務める傍ら、自身は北アルプスをフィールドに高山における動植物の研究をしていた。また、登山経験が豊富で、かつ、高山植物などに詳しい研究者であり教育者でもあるということから、長野県師範学校で同級生であった河野齢蔵とともに皇族登山の案内役としても幾度となく北アルプスに登っている[1)]。

矢澤が案内役を務めた皇族登山については、しばしば新聞記事で報じられている。例えば、1921（大正10）年7月31日付の東京朝日新聞[2, 3)]には、30日に北アルプスの針ノ木峠で朝香宮が雷鳥や羚羊の写真を撮ったことや、この日の宿泊地である南澤小屋に午後4時に到着したことなどが写真とともに記載されている。つまり、前日の登山の様子を伝えているのである。通信技術が発達していなかったこのころに、山岳地帯からどのようにして素早く情報を伝えたのだろうか。

そのような疑問をもったころ、松高山岳部報『わらぢ』に伝書鳩に関する記述を見つけた。もしかしたら、伝書鳩が新聞記事を運んだのかもしれない。そして、松本高等学校に伝書鳩がいたことを知る人も今はいないのではないか。そのようなことから、松高山岳部の伝書鳩について調べることになったのである。

２．伝書鳩とは

伝書鳩の祖先は、エジプトからペルシャ、インド、中国にかけて広範囲に生息し、山岳地帯の岩場で繁殖していた「カワラバト」という鳩の一種で、それを人間が飼いならし、通信のために使うようになったのが伝書鳩である[4)]。（以下、注4の文献を中心に紹介しておきたい。）

カワラバトの羽色は、全体に青灰色で、首から胸にかけて金属光沢があり、腰は白く、翼には2本の黒い線があり、尾の縁には黒色の帯がある。種々の色彩からなるモザイク的な配色

のものまで、実に変化に富んでいる[5)]。寺社や公園などでよく見かけるドバトは、家畜化した伝書鳩が再び野生化したもので、ルーツは同じカワラバトである。そのため、しばしば、カワラバト（ドバト）と表記される。なによりも、優れた帰巣本能と長距離を飛ぶ力を持ち合わせていることが特徴で、その能力を利用し遠隔地からメッセージを届けさせる通信手段に使われた。

鳩は一年中一定の地域に棲息する「留鳥」であり、視覚、太陽の位置、磁気、嗅覚、聴覚といった様々な情報を感じ取って帰巣することがわかっている。時速にして約60㎞の速さで飛ぶことができるので、理論上は北アルプスー松本間（直線距離約50㎞）を1時間以内で到達するという計算である。しかし、遠くから放たれた鳩は、途中、寄り道してくるものもいるし、鷹などに襲われることもある。そのため、戻るまでにかかる時間もそれぞれ違い、なかには傷を負って帰ってこられないものもある。そのようなことから、同じ通信文を複数の伝書鳩に持たせて飛ばすことが多かったという。

通信文は、鉛筆ぐらいの太さの金属の筒に丸めて入れ、足に取り付けて運ぶ（写真1)。写真フィルムは、1920年代に使われ始めたパルモスというドイツ製の9×12センチ判の写真フィルムの場合であれば、太さがちょうど万年筆くらいで長さ10センチほどのセルロイド製の「写真筒」にフィルムを丸めて入れ、鳩の背中にゴムバンドで背負わせて運ぶのである。また、鳩を携帯するときは籠に入れて背負い（写真2)、数が多いときなどは荷車に乗せて曳いていくなどして運んだ（写真3)。

写真１　通信筒を附けた伝書鳩（『伝書鳩』1922.
図版第七）[6)]

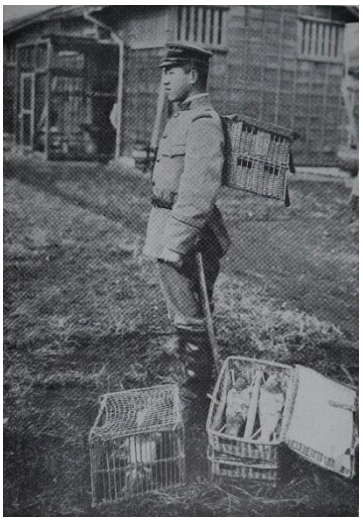


写真２　伝書鳩乗馬携帯法（『伝書鳩』1922. 図版第六）[6)]

写真３　自転車曳八羽入移動鳩舎（『伝書鳩』1922. 図版第五）[6)]

日本で伝書鳩を使った通信がはじめて文献に登場するのは、江戸時代後期の1783（天明3）年3月4日付の「大阪町奉行触書」で、大阪の米商人が米相場の連絡に伝書鳩を使って利益を得たため幕府に捕縛されたという内容である。

日本で伝書鳩を使用して通信した主な例としては、軍で使われた鳩（軍用鳩）と新聞社で使われた鳩があげられる。軍による鳩通信について初めて新聞記事に登場するのが、1886（明治19）年1月23日付の東京横浜毎日新聞で、陸軍電信隊が鳩による通信を行ったことが書かれている。

一方新聞社は、陸軍の通信鳩に着目した東京朝日新聞が、1893（明治26）年1月に伝書鳩を飼い始め、しばしば放鳩実験をしていて、1895（明治28）年6月、品川駅から原稿を付けた伝書鳩を使ったことを初めて紙面に載せている。1923（大正12）年9月に発生した関東大震災の際には陸軍の軍用鳩が大活躍し、これ以降、伝書鳩を導入する新聞社が増えた[7)]。

通信技術の発達とともに伝書鳩は役割を終えるが、各新聞社では、1965（昭和40）年ころまで伝書鳩を使って原稿を届けていた[8)]。かつて東京朝日新聞社があった有楽町マリオン14階には、それまでの活躍を称えて建てられた2羽の伝書鳩のブロンズ像が今も残っている[9)]。

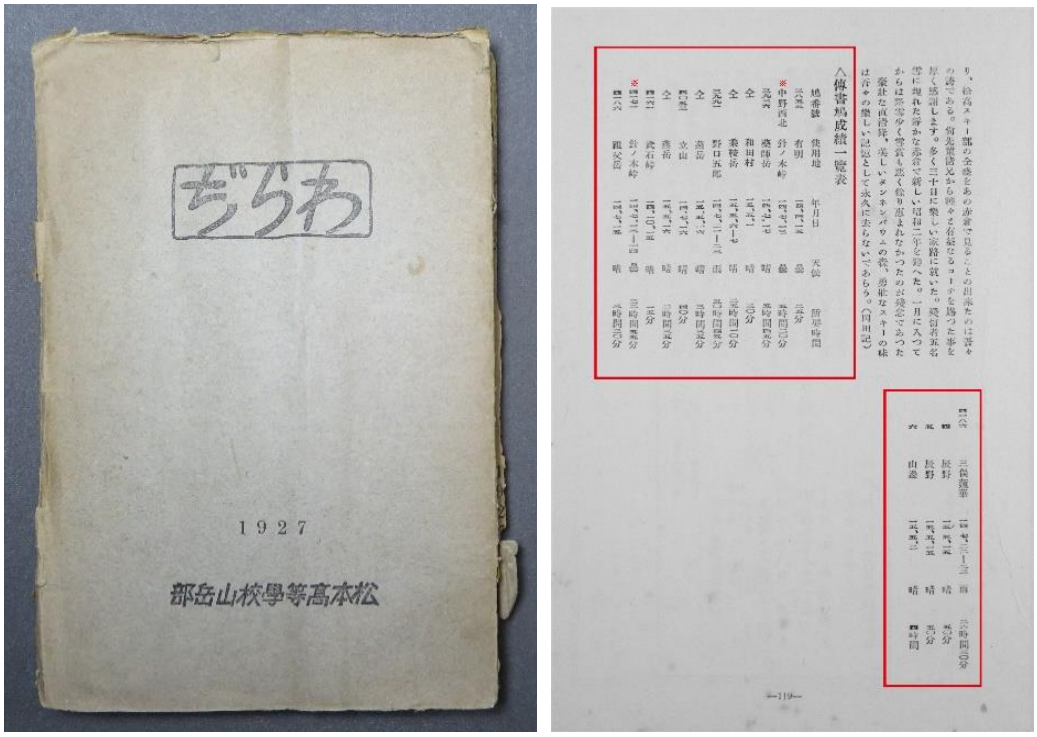
現在では、伝書鳩は主にレース用として飼育されている。2020（令和2）年11月15日ベルギーで行われたレース鳩のオークションでは、2歳のメス鳩が史上最高額の160万ユーロ（約1億9800万円）で落札されている[10)]。これは極端な例であるが、ネットオークションなどでは一羽数万円から売られており、愛好家の間では今でも人気がある。

３．松本高等学校資料にみる伝書鳩

３－１．松高山岳部の部報『わらぢ』

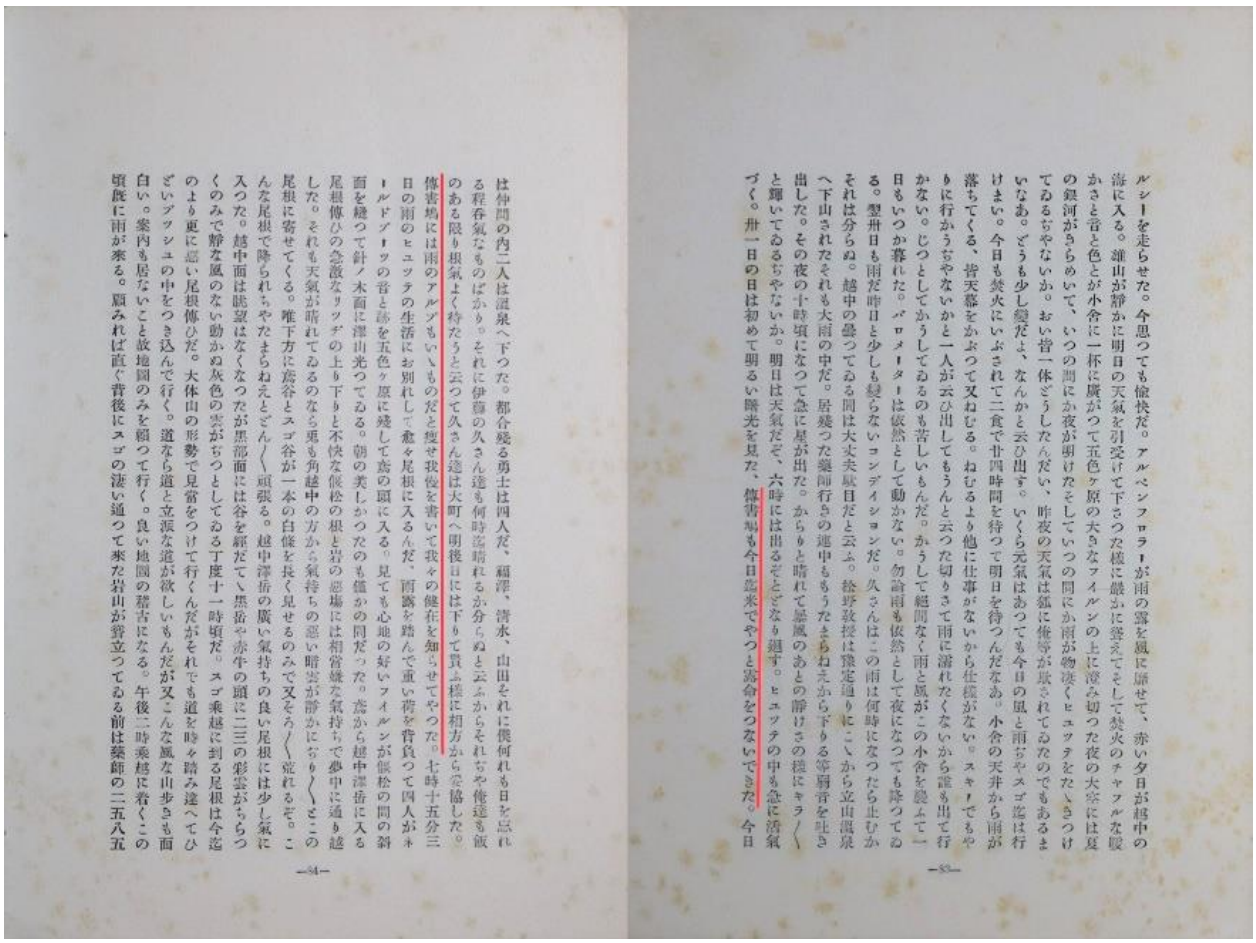
信州大学大学史資料センター（以下、大学史資料センター）には、卒業生から寄贈された松高山岳部の部報『わらぢ』が保存されている。『わらぢ』は1921（大正10）年10月に山岳雑誌『草鞋』として創刊し、1946（昭和21）年まで断続的に発行された。矢澤部長の所感にはじまり、山行記録や部員たちによる登山紀行文などがまとめられている。

この部報のなかに、伝書鳩に関する記述がある。1927（昭和2）年発行の『わらぢ』[11]には、「伝書鳩成績表」（資料1）があり、鳩の固有番号と放った場所、日付、天候、所要時間が書かれている。ここから、松高山岳部には伝書鳩がいて、部員たちが様々な場所から鳩を飛ばしていたことがわかる。また、雨の日は時間がかかることや、針ノ木峠から放った2羽の鳩がそれぞれ5時間20分、32時間55分かかっていることから、鳩にも個体差があることが読み取れる。



資料１　松本高等学校山岳部,『わらぢ』,原人社,1927.p119
（大学史資料センター所蔵）表紙（左）,伝書鳩成績一覧表

また、村橋素一郎は薬師岳に登った紀行文で、雨模様の天候が続く中、「伝書鳩も今日迄やっと露命をつないできた。」「雨のアルプもいいものだとやせ我慢を書いて我々の健在を知らせてやった。」と伝書鳩に手紙を託したことを書いている（資料2）[11]。



ルシーを走らせた。今思つても愉快だ。アルペンフラーが雨の露を風に靡せて、赤い夕日が褐中の海に入る。雄山が静かに明日の天氣を引受けて下さつた様に嚴かに聳えてそして焚火のチャフルな暖かさと音と色とが小舎に一杯に廣がつて五色ヶ原の大きなフィルンの上に滲み切つた夜の大空には夏の銀河がきらめいて、いつの間にか夜が明けたそしていつの間にか雨が物凄くヒュッテをたゝきつけてゐるぢやないか。おい皆一体どうしたんだい、昨夜の天氣は狐に化等が欺されてゐたのでもあるまいなあ。どうも少し變だよ、なんかと云ひ出す。いくら元氣はあつても今日の風と雨ぢやスゴ篭は行けまい。今日も焚火にいぶされて二食で廿四時間を待つんだなあ。小舎の天井から雨が落ちてくる、皆天幕をかぶつて又ねむる。ねむるより他に仕事がないから仕様がない。スキ！でもやりに行かうぢやないかと一人が云ひ出してもうんと云つた切りさて雨に濡れたくないから誰も出て行かない。じつとしてかうしてゐるのも苦しいもんだ。かうして經間なく雨と風がこの小舎を襲ふて一日もいつか暮れた。バロメーターは依然として動かない。勿論雨も依然として夜になつても降つてゐる。翌卅日も雨だ昨日と少しも變らないコンディションだ。久さんはこの雨は何時になつたら止むかそれは分らぬ。越中の曇つてゐる間は大丈夫風日だと云ふ。松野教授は豫定通りに〻〻から立山温泉へ下山されたそれも大雨の中だ。居殘つた藥師行きの連中ももうたまらねえから下りる笠鳴音を吐き出した。その夜の十時頃になつて急に星が出た。からりと晴れて屋風のあとの靜けさの様にキラ／＼と輝いてゐるぢやないか。明日は天氣だぞ、六時には出るぞとどなり廻す。ヒュッテの中も急に活氣づく。卅一日の日は初めて明るい曙光を見た、傳書鳩も今日遥来でやつと落命をつないできた。今日

—83—

は仲間の内二人は温泉へ下つた。都合殘る勇士は四人だ、福澤、清水、山田それに僕何れも日を忘れる程呑氣なものばかり。それに伊藤の久さん達も何時迄晴れるか分らぬと云ふからそれぢや俺達も飯のある限り根氣よく待たうと云つて久さん達は大町へ明後日には下りて貰ふ様に相方から交渉した。傳書鳩には雨のアルプもいゝものだと狂せ我慢を書いて我々の健在を知らせてやつた。七時十五分三日の雨のヒュッテの生活にお別れして愈々尾根に入るんだ、雨露を踏んで重い荷を背負つて四人がネールドグリッの音と跡を五色ヶ原に殘して蕊の頭に入る。見ても心地の好いフィルンが偃松の間の斜面を縫つて針ノ木面に澤山光つてゐる。朝の美しかつたのも僅かの間だつた。蕊から越中澤岳に入る尾根傳ひの急激なリッヂの上り下りと不快な偃松の根と岩の惡場には相當嫌な氣持ちで夢中に通り越した。それも天氣が晴れてゐるのなら兎も角越中の方から氣持ちの惡い暗雲が靜かにおり〳〵とこの尾根に寄せてくる。唯下方に蕊谷とスゴ谷が一本の白條を長く見せるのみで又そろ〳〵荒れるぞ。こんな尾根で降られやたまらねえとどん〳〵頑張る。越中澤岳の廣い氣持ちの良い尾根には少し氣に入つた。越中面は眺望はなくなつたが黒部面には谷を經だて〻黒岳や赤牛の頭に二三の彩雲がちらつくのみで靜な風のない動かぬ灰色の雲がちつとしてゐる丁度十一時頃だ。スゴ乗越に到る尾根は今迄のより更に惡い尾根傳ひだ。大体山の形勢で見當をつけて行くんだがそれでも道を時々踏み違へてひどいブッシュの中をつき込んで行く。道なら道と立派な道が欲しいもんだが又こんな風な山歩きも面白い。案内も居ないこと故地圖のみを頼つて行く。良い地圖の稽古になる。午後二時乗越に着くこの頃既に雨が來る。眉みれば直ぐ背後にスゴの淡い道つて來た岩山が聳立つてゐる前は藥師の二五八五

—84—

資料２　村橋素一郎，「雨に崇められて薬師岳へ」『わらぢ』，松本高等学校山岳部，1927.p83-84（大学史資料センター所蔵）

３－２.『われらの青春ここにありき』（松本高等学校同窓会編集）の伝書鳩記事

松本高等学校の歴史と卒業生による様々なエピソードを集めた『われらの青春ここにありき』（1953）には、松本高等学校第二代校長大渡忠太郎（以下「大渡校長」）（任期：1921（大正10）年11月～1927（昭和2）年8月）が学校施設整備に尽力し、松高山岳部のため遭難防止に備えた伝書鳩の小屋を造ったことが書かれている。赴任当時の殺風景な校庭にヒマラヤ杉や桜の若木を植えたのも大渡校長である。また、大渡校長の次男は、伝書鳩のカゴを背負わされて穂高に登ったエピソードを紹介している[12,13)]。

また、松高山岳部員かどうかは不明だが、伊東不二男（13回文乙）が松本高等学校の伝書鳩について特に詳しく書いている（資料3）[12)]。そのなかで、鳩舎が松本高等学校敷地内のホール南側にあり、1932（昭和7）年までは伝書鳩を飼っていて、鳩の世話係だった講師の転出をきっかけに松本高等学校の伝書鳩が姿を消したと書いている。また、しばしば遭難者の安否を知らせる手紙を持ち帰るなど、松高山岳部の伝書鳩は山岳通信に大きな役割を果たしていたことがわかる（資料3）。

松高の伝書鳩

伊東 不二男（13回文乙）

昭和七年まで松本高校では伝書鳩を飼っていた。

ホールの建物の南側に睡蓮の小さな池があり、その傍に立派な鳩舎があった。数十羽の鳩が毎朝アルペンの山脈を背景に、夕べには陽を斜めにうけて縣の森をかすめて群翔しているのがみられた。そして山登りのシーズンになると、山から通信筒をつけた鳩が到着台に帰着していた。

こんな鳩による山岳通信は、まことに山の高校にふさわしい、異色のものである。創意工夫に富んだ大渡校長の発想である。関東大震災の前年にすでに鳩舎が完成していたので、卓見というべきであろう。

上高地への入口、島々まで松本電鉄が開通したのが大正十一年（松本―浅間線の開通は同十三年）、上高地に電話が開設されたのはずっと後の昭和十一年のことである。そんな時代だったので、いったん山へ入れば、下界への連絡がとれない。それだけに登山者にとって鳩による通信は想像以上に価値があり、珍らしさも手伝い、誰彼となしに鳩籠を携行した。そして各地の山々から頻繁に飛ばしている。

ただ、その帰還成績には非常にムラがあった。山岳部の記録（大正十五年）によると、たとえば、立山から四十分はまずまずとして、針ノ木峠からの放鳩で一羽が五時間二十分かかっているのに、同時に放ったもう一羽がその何倍も費している。

これらの鳩群は、陸軍の軍用鳩の払い下げと松高で生まれたその子孫たちであるが、鳩自体の個体差があり、そのうえ扱い方の不馴れによって帰着にムラができたようである。それに山岳地帯の地形の複雑さ、とくに特有の悪気流は飛翔をいちじるしく阻害した。

だが、この天使たちはしばしば偉効を発揮した。大正十四年五月、寮生四人が乗鞍に向ったまま、予定日にも帰寮せず、捜索隊を出すなど大騒ぎとなったが、無事であるという第一報は鳩がもたらした。捜索隊の携行していった鳩が二十六日午後三時半、浅若晁教授の通信文をもって帰着したのである。

午後四時（二十五日）、前川渡茶屋着、上高地帰りの人夫の話にて様子が判明した。それによると、寮生四名は去る二十二日夜番所に泊り、二十三日乗鞍登山して無事下山。上番所附近にキャンプし、二十四日番所附近から白骨温泉を経て上高地に向かい、途中の中の湯迄行きて泊る。二十五日中の湯を出発し、上高地温泉に行き、其夜は多分徳本峠の附近にて露営の筈。上高地迄は無事なりし事は明らかなり。……

信濃毎日新聞社がアルプスの遭難に鳩を活発に使いだしたのが昭和初期だから、このような山岳通信に伝書鳩を活用したのは、松高が草分けといってよさそうだ。

松高における伝書鳩の訓練、朝夕の飛翔運動、給餌は、私たちの時代には、新美彦市講師が熱心に行なっており、時に松高生に人気のあった娘さんが手伝っていた。しかし昭和七年になると、新美さんが転出が決まり、後任者もなく、十年にわたり活躍した松高の伝書鳩は姿を消してしまった。

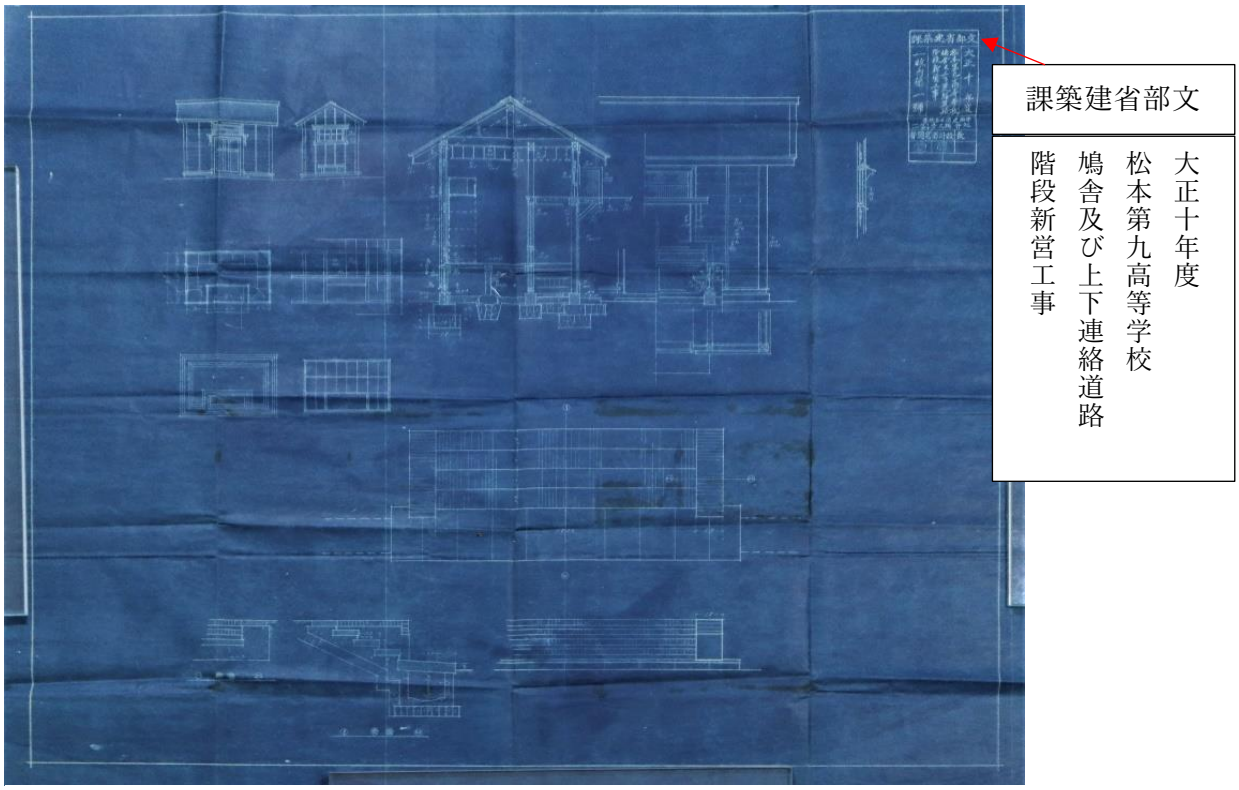
そして鳩は松本測候所に引取られ、翌八年夏には測候所が一般登山者に通信用として貸与したようである。

また、間口一間半、奥行一間ぐらいの鳩舎は、到着台、トラップ（到着台に帰着した鳩がトラップをくぐり鳩舎に入る）がはずされ、野球部の部室になってしまったが、後々までも、ハトゴヤの愛称で呼ばれていた。

資料３　伊東不二男,「松高の伝書鳩」『われらの青春ここにありき』,
松本高等学校同窓会,1978.p185

３－３．建築設計図面

松本高等学校は設立当初、松本城二の丸にあった県立松本中学校（現深志高校）の一部を仮校舎としていたが、1920（大正9）年7月、現在のあがたの森公園の土地（約2万坪の敷地）に校舎を新築した。校舎等の建物設計図面が信州大学附属図書館（以下、附属図書館）に残されており、そのなかには鳩舎の建物図面も見られる（資料4)。



資料４　松本高等学校の新築設計図面「動物飼育室　運動場階段」
「松本（第九）高等学校　鳩舎并上下連絡道路階段新鋭工事」（附属図書館所蔵）

では、この鳩舎はどこにあったのだろうか。

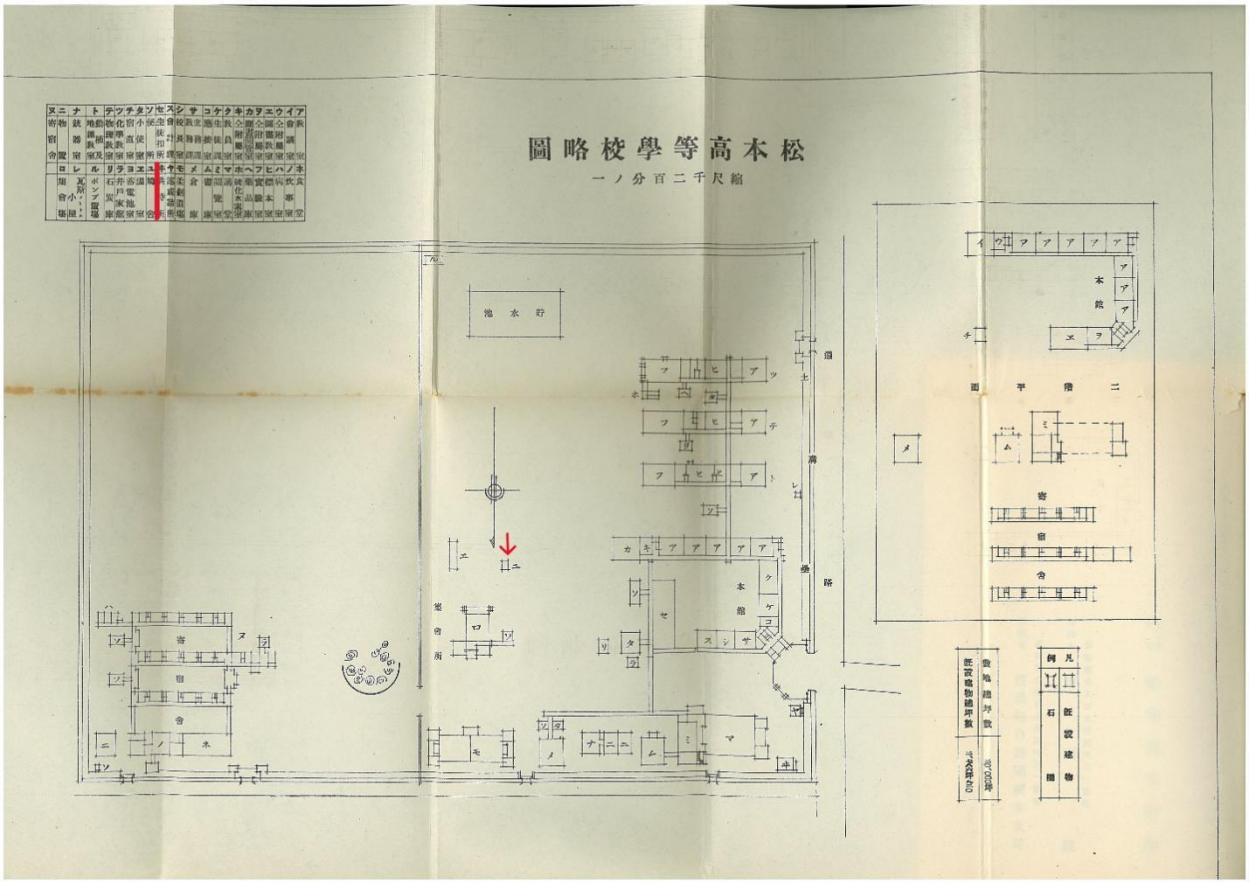
『松本高等学校一覧』(大正13年11月20日発行) の「松本高等学校略図　縮尺千二百分ノ一」(資料5) には、図の中央付近にある建物（赤印部分）が「鳩舎」であるとはっきり書かれている[14)]。また、「松本高等学校落成建物平面図　縮尺六百分之一」(資料6) には、同じ位置に「動物飼育室」と書かれた建物が描かれている。これは、松本高等学校「設計図索引」[15)] の新築項目として「動物飼育室、運動場階段」と記載されていることから、新築当初の「鳩舎」は「動物飼育室」という名称であったと推測され、資料6は大渡校長が赴任後の大正10年頃作成された図面であると考えられる。さらに鳩舎は、「松高の伝書鳩」(資料3) の「ホールの建物の南側に睡蓮の小さな池がありその傍に立派な鳩舎があった。」という記述とも一致する。「ホール」とは「集会場」のことで、「小さな池」は、「松本高等学校全図　縮尺六百分ノ一」[12)] にある「貯水池」がそれであると考えられる。

これに加え、1922 (大正11) 年10月10日発行の『落成記念寫真帖』(資料7) には鳩舎と温室の写真があり、鳩舎の図面 (資料4) と見比べてみても同じ建物であることがわかる。また、

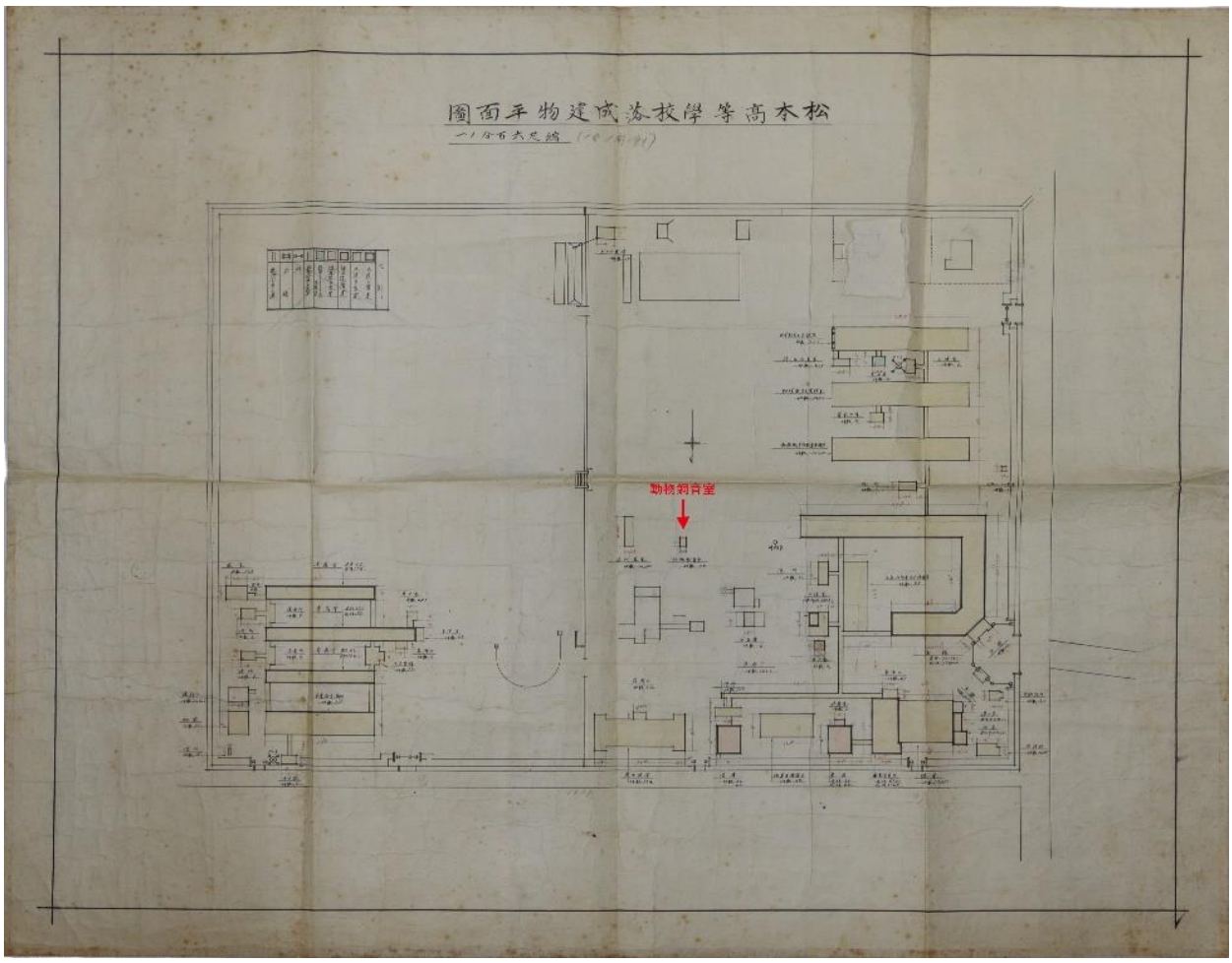
『信州松本絵葉書集成』(2009)(資料8)には、「松本高等学校　鳩舎」の絵葉書が載っている。このように、当時の学校施設としては珍しいものだったことが伺える。

松高山岳部の伝書鳩たちは、松本高等学校敷地内にあるこの鳩舎に住んでいて、登山に同行するときは一緒に連れていかれ、山岳地帯から放たれると手紙を付けてここに帰ってきたのである。

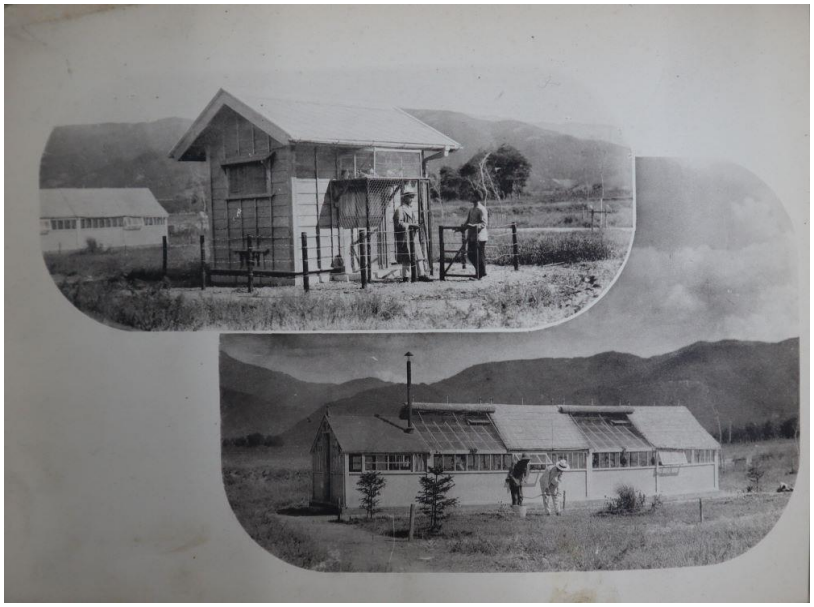
ちなみに、「松本高等学校及松本高等学校官舎建物配置図　縮尺六百分ノ一」(資料9)には、「動物飼育室」や「鳩舎」といった文字はない。図面の制作年は不明だが、鳩舎のあった場所には「物置」と書かれていて、開校当初にはなかったテニスコートや運動場など他の設備が増えていることからも、伝書鳩がいなくなった昭和7年以降の図面であると推測される。



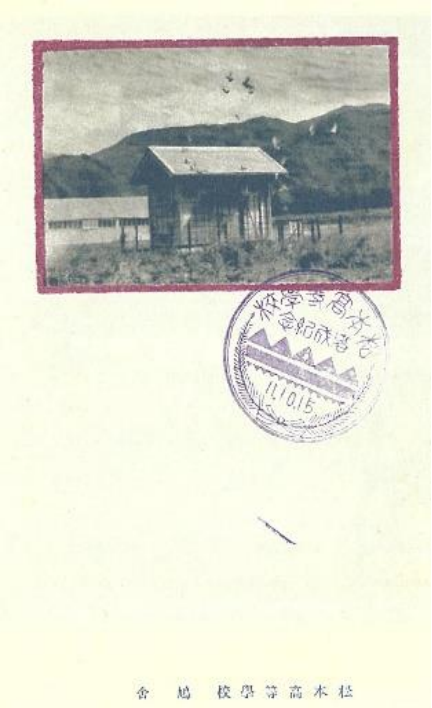
資料５　「松本高等学校略図　縮尺千二百分ノ一」『松本高等学校一覧』,
松本高等学校, 1924.（附属図書館蔵）[14)]



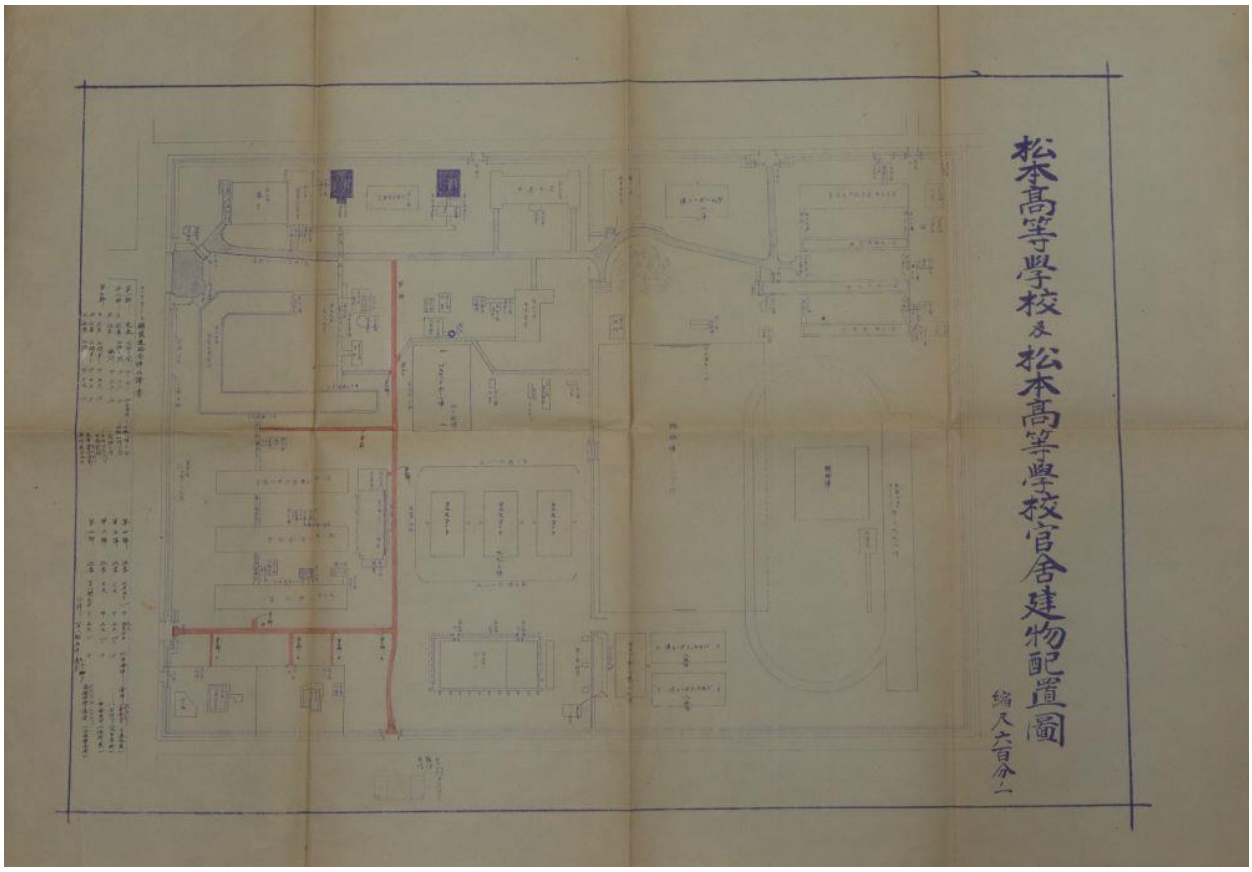
資料６　「松本高等学校落成建物平面図　縮尺六百分之一」（附属図書館所蔵）



資料７　「鳩舎（上）温室（下）」『落成記念寫真帖』,
松本高等学校, 1921.（附属図書館所蔵）[16)]



資料８　柳沢孝夫編;窪田雅之 監修・解説,「松本高等学校　鳩舍」
『信州松本絵葉書集成』, 書肆秋櫻舎, 2009.（附属図書館所蔵）



資料９　「松本高等学校及松本高等学校官舍建物配置図　縮尺六百分ノ一」
（附属図書館所蔵）

４．新聞記事に見る松高山岳部の鳩通信

1890（明治23）年に、東京－横浜間で電話交換が開始され、それまで電報を使っていた新聞社でも電話を使って記事を伝えるようになった。伝書鳩を通信用に使い始めたのは東京朝日新聞社で、1893（明治26）年のことである。また、写真を送るための電送機は大正末期から昭和にかけて実用化された[7)]。

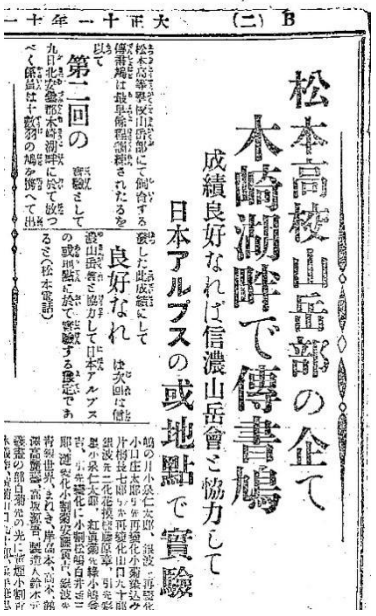
長野県の地方新聞・信濃毎日新聞に、はじめて伝書鳩について書かれた記事が登場するのは1887（明治20）年である。3月24日付の紙面に陸軍が行った伝書鳩試験（神奈川・静岡・千葉－東京間）についての記事が載っている[18)]。その後1922（大正11）年までの間、松高山岳部の鳩通信について報じられるまで信濃毎日新聞に「伝書鳩」の記事は見当たらない。

1922（大正11）年11月10日付の信濃毎日新聞に、松高山岳部が訓練のため飼育している伝書鳩を10数羽連れて木崎湖畔へ出発したという記事がある。さらに、成績が良ければ次は信濃山岳会と協力して日本アルプスで実験する予定であると書かれている（資料10）[19)]。翌年1923（大正12）年5月8日付の記事には、松高山岳部は3回にわたって実験を行っていて、4月に王ヶ鼻から、4月21日には乗鞍岳から、5月6日には白馬岳からそれぞれ数羽ずつ放ち、3回目の白馬岳は、信濃山岳会員の山口勝が伝書鳩を携帯していったとある。結果は、2回目の実験の1羽を除き、いずれも数時間から翌日のうちに戻ってきたと報じている（資料11）[20)]。同じく夕刊には、「日本アルプスからの伝書鳩　松高校庭に到着　成績は極めて良好なり」という記事が載り、当時の鳩係（新聞記事には丸山教諭と書かれている）の話では、「雨の中、夜を超えたにもかかわらず成績が良い。」とのことであった[21)]。

さらに、1923（大正12）年7月24日付朝日新聞朝刊では、秩父宮一行の登山の際に矢澤と信濃鉄道山岳部員[22)]の山口勝が同行し、松本高等学校の伝書鳩6羽を連れていき、槍ヶ岳や穂高岳頂上から宮様の消息を伝えたと報じている[23)]。このように、1922（大正11）年から1923（大正12）年にかけて精力的に伝書鳩を活用していることがわかる。

なお、資料11の記事ではこれまでに山岳地帯から伝書鳩を放った例が2つ挙げられている。ひとつは、1923（大正12）年7月27日の摂政宮（昭和天皇）の富士山登山である。『昭和天皇実録　第三』[24)]の大正十二年七月二十七日には、富士登山や伝書鳩通信について書かれていて、「今回の富士御登山では通信に陸軍電信隊の用意した軍用伝書鳩が用いられ、皇太子ご自身も、六合目、奥宮等より日光田母沢御用邸御避暑中の天皇・皇后へご機嫌伺い並びに御登山ご報告の文を認められ、自ら伝書鳩を放たれる。」という記述がある。また、翌日28日付の東京朝日新聞[25)]では、登山の様子や鳩通信をしたことについて写真とともに掲載している[26)]。そしてもうひとつは、1922（大正11）年7月27日付の信濃毎日新聞記事[27)]にある朝香宮の南アルプス登山がそれであると考えられるが、文中に「伝書鳩」の記述は見られない。

このように、山岳地帯から伝書鳩を通信に利用した例は少なく、昭和天皇の富士山からの伝書鳩通信以前に松高山岳部の伝書鳩実験が行われていることからも、松高山岳部の伝書鳩通信は先駆的で珍しいものであるといえる。



B（二）　大正十一年十一

松本高校山岳部の企て
木崎湖畔で傳書鳩
成績良好なれば信濃山岳會と協力して
日本アルプスの或地點で實驗

松本高等學校山岳部にて例年する傳書鳩は最近新潟湖畔されたるを以て

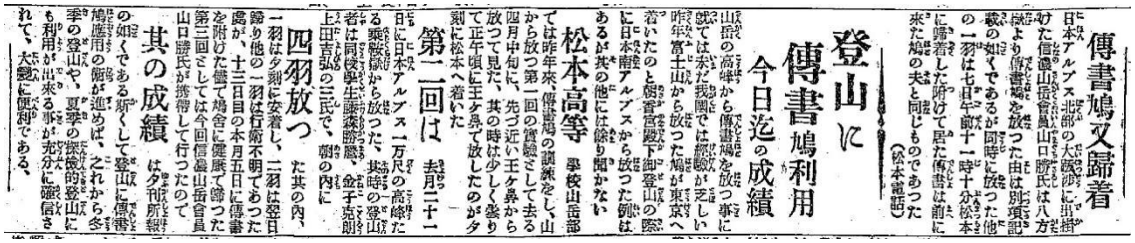
第二回の實驗として

九日北安曇郡木崎湖畔に於て放つべく鳩は十數羽の鳩を携へて出

良好なれ

は次回は信濃山岳會と協力して日本アルプスの或地點に於て實驗する豫定であるさ（松本電話）

資料１０　「松本高校山岳部の企て　木崎湖畔で伝書鳩」
『信濃毎日新聞』1922（大正11）年11月10日，夕刊，2面[19]



傳書鳩又歸着

日本アルプス北部の大町に出張した信濃山岳會員山口勝氏は八方より傳書鳩を放つた由は別項記載の如くであるが同時に放つた他の一羽は七日午前十一時十分松本に歸着した附けて居た傳書は前に來た鳩の夫と同じものであつた（松本電話）

登山に傳書鳩利用
今日迄の成績

山岳の高峰から傳書鳩を放つ事に就ては未だ我國では殆んど試みず昨年富士山から放つた鳩が東京へ着いたのと閑院宮殿下御登山の際に日本南アルプスから放つた例はあるが其の他には餘り聞かない

松本高等學校山岳部では昨年來、傳書鳩の訓練をし、山から放つ第一回の實驗として去る四月中旬に、先づ近い王ケ鼻から放つて見た、其の時は少し曇りて正午頃に王ケ鼻で放したのが夕刻に松本へ着いた

第一回は　去月二十一日に日本アルプス一万尺の高峰たる乘鞍嶽から放つた、其時の登山者は同校學生藤森勝麿、金子忠朗、上田吉弘の三氏で、朝の内に

四羽放つ　た其の内、一羽は夕刻に安着し、二羽は翌日過り他の一羽は行方不明であつた處が、十三日目の本月五日に傳書を附けた儘で鳩舎に健康で歸つた第三回としては今回信濃山岳會員山口勝氏が携帯して行つたので

其の成績　は夕刊所報の如くである斯くして登山に傳書鳩應用の例が進めば、これから冬季の登山や、夏季の探險的登山にも利用が出來る事が充分に確信されて、大變に便利である、

資料１１　「伝書鳩又帰着」「登山に傳書鳩利用」『信濃毎日新聞』
1923（大正12）年　5月8日，朝刊，3面.[20]

５．軍用鳩

松高山岳部で活躍した伝書鳩は、部報『わらぢ』や資料3にあるように、軍から払い下げられた鳩と松本高等学校で生まれたその子孫たちだった。それは、現在の松本キャンパスの地にかつてあった陸軍歩兵第50連隊（以下、松本連隊）の軍用鳩であると考えていいだろう。

附属図書館の蔵書に、岩田巌『伝書鳩』(1922）がある。これは、松本高等学校から受け継がれた図書で、1922（大正11）年9月30日に科学知識普及会から発行されている[6]。軍用鳩調査委員・陸軍騎兵少佐であった岩田によって書かれたこの書は、伝書鳩の歴史や特徴、飼育方法や訓練、病気の治療法にいたるまでまとめられた伝書鳩の専門書である。矢澤をはじめ松高山岳部員たちは、鳩の飼育にこの図書を参考にしていた可能性もある。

松本連隊の鳩による通信については、1924（大正13）年7月22日付の信濃毎日新聞に松本連

隊機関銃隊が乗鞍岳から伝書鳩に電信文を託したという記事がある[28]。このなかで「初めて遠方から飛んだ鳩としては好成績の1時間10分であった。」と書いていて、このときようやく、松本連隊が山岳地帯から伝書鳩を利用したことがわかる。

ところで、軍用鳩は松高山岳部だけが利用していたわけではない。

例えば、松本測候所でも登山期に北アルプス各山頂の気象速報を伝えるために払い下げの軍用鳩を使っている。1933（昭和8）年7月11日付の信濃毎日新聞記事には、7月8日に山岳気象の実況放送のため、はじめて白馬頂上から伝書鳩を放ったが、飼育訓練をした北城村役場と測候所の鳩舎を飛び越して2時間かけて松本連隊の古巣に戻ってきたというエピソードを載せている[29]。

また、1936(昭和11)年には、東京出身の三田旭男が山岳遭難事故の防止と救助を目的に大町駅前に中部山岳鳩協会を設立している。ここでも松本連隊から払い下げを受けた軍用鳩を使っている。三田が伝書鳩を利用した山岳通信事業は1941（昭和16）年まで続いた[30]。

６．松本高等学校以外の山岳部

戦前の高等教育機関における山岳部のはじまりは、金沢大学の前身、旧制第四高等学校の1898（明治31）年の遠足部（のちに山岳部）が最も古いと思われる[31]。つづいて、1912（明治45）年札幌農学校（北海道大学）スキー部（のちに山岳部）、1912（大正元年）第一高（東京大学）スキー山岳部、1913（大正2）年第三高（京都大学）山岳部、1914（大正3）年第二高（東北大学）山岳部、1915（大正4）年慶應義塾大学山岳会、青山学院大学山岳部、1916（大正５）年第五高（熊本大学）山岳会が創立されている。前述のとおり、旧制松本高等学校（信州大学）山岳部は1920（大正9）年、同年に早稲田大学山岳会、1922（大正11）年明治大学山岳部、1924（大正13）年日本大学山岳部と続く。

このように、明治から大正期にかけて多くの高等教育機関で山岳部が創られ、学生登山が盛んに行なわれるようになり、各地から日本のアルプスをもとめて信州にやってきている。

これらの山岳部（会）に「伝書鳩」についての記録や聞き伝えなどがないか、可能な限り連絡をとったところ、金沢大学、京都大学、神戸大学、日本大学の4校から回答があったが、いずれも「伝書鳩」については聞いたことがないという回答であった。

９．おわりに

松本高等学校には鳩舎があり、松高山岳部は軍より払い下げられた鳩を飼育し、山岳通信に利用していたことがわかった。松高山岳部の伝書鳩実験については、しばしば新聞でも報じられ、記事の内容からも矢澤が関係していることは間違いない。

矢澤が松本高等学校在任中の1919（大正8）年から1924（大正13）年は、山岳通信に伝書鳩を利用するための実験期間だったといえるのではないだろうか。特に、1923（大正12）年に

は集中的に実験を行っている。残念なことに、1922（大正12）年3月から1927（昭和2）年4月まで山岳部報『わらぢ』は休刊しているため、松高山岳部の直接的資料からこの間の伝書鳩について詳細を確認することは難しい。

しかしながら、松本連隊が山岳地帯から伝書鳩を利用したのが1924（大正13）年、松本測候所や中部山岳鳩協会がそれぞれ1933（昭和8）年、1936（昭和11）年であるので、松高山岳部は伝書鳩を山岳通信に本格的に利用した草分けといえるだろう。また、名だたる他校の山岳部においても伝書鳩については聞いたことがないということからも、松高山岳部の伝書鳩の利用は類を見ないものである。

矢澤は『鳥獣虫魚』(1927）の「いへばと（鴿)」[32] のなかで、「特に伝書鳩は最も飛翔迅速で、一時間に約十里内外を容易く飛行することができる。」とカワラバト（ドバト）の生態について解説していることからも伝書鳩について研究していたことがうかがえる。信州における博物学研究の第一人者である矢澤は、山岳通信に伝書鳩の特性を活かすことにいち早く着目していたのではないだろうか。引き続き、矢澤の残した資料に関連資料がないか調査していきたい。

なお、1921（大正10）年の朝香宮登山に伝書鳩を連れて行ったという記録は見つかっていないため、伝書鳩が原稿や写真を運んだのかどうかは不明である。この登山については2022（令和4）年の大学史資料センター企画展Web版[1]で詳しくまとめられているが、ここに出てくる南澤小屋というのは、大町から扇沢を通って針ノ木峠を越え、針ノ木谷に沿って黒部湖へ向かう途中の南澤出合付近であると考えられる。南澤小屋から扇沢まで約11ｋｍ、11時間の道のりである[33]。さらに大町市内まで行くとなると、どんなに速くても1日はかかるので、伝書鳩を利用していても不思議ではない。

一方で、『わらぢ』第2号（1921）[34] に、東京日日新聞記者の赤地汎が「渓間の暁 朝香宮殿下陪従の思い出」という文を寄せている。一行は、7月29日の朝9時に大町を出発して午後4時半に大澤小屋に到着したと書いている。そして、大澤小屋に野営した次の日（30日)、「自分はその日針ノ木の雪渓を渡らずに帰つて了つた。それから三日程して一緒に登つた朝日の大内君、報知の佐々木君、日報の服部君等が帰つて来た。(ママ)」と書いている。７月31日付の東京朝日朝刊記事には、「大内特派員（三十日大町電話)」とあるので、30日に大町から大内記者が電話で伝えたのだと読み取れるが、赤地の文からは大内記者は30日には戻ってきていないことになり、矛盾しているのではないかという疑問も浮かび上がってきた[35]。

さらに、大渡校長は、松高山岳部のために鳩舎を建設するなど、伝書鳩についても先見の明があったといえる。植物学者でもあった大渡校長と博物学者であった矢澤との間にはおそらく接点があったと考えられるため、2人の繋がりを明らかにすることも今後の課題である。

鳩の特性を考えると、現在あがたの森公園にいる鳩のなかには、松高山岳部の末裔がいるのかもしれないと思える。信州大学自然科学館には、矢澤らが収集した動植物を含め、松本女子師範学校や松本高等学校時代から受け継がれてきた様々な資料が保管されている。その中にはドバトの剥製も残されているので、松本高等学校伝書鳩につながる何かがわかるか調

査してみたい。

謝辞

本研究を進めるにあたって、大学史資料センター福島特任教授、坂元技術補佐員、ならびに附属図書館小島副課長には、伝書鳩に関連する新聞記事や資料をはじめ、貴重な助言をいただきました。ここに感謝の意を表します。

注

1) 信州大学 大学史資料センター「大学史資料センター企画展『明治・大正期信濃博物学の夜明けと長野師範学校－矢澤米三郎とライチョウ標本を中心に－』(Web版) のご案内」https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/news/display/-web.html (参照2023-06-07)
2) 「深山桜咲く針木峠で雷鳥や羚羊をカメラに」『信濃毎日新聞』1921 (大正10) 年7月31日, 朝刊, 5面.
3) 「雷鳴と豪雨に物凄い御一夜」「温草鞋を直して」『信濃毎日新聞』1921 (大正10) 年7月31日, 夕刊, 2面.
4) 黒岩比佐子, 『伝書鳩－もう一つのIT』, 文春新書, 2000, p. 214.
5) 公益財団法人 山科鳥類研究所「1. 1 カワラバトと「ドバト」https://www.yamashina.or.jp/hp/kenkyu_chosa/dobato/hato11.html (参照2023-12-18)
6) 岩田巖著, 『伝書鳩』, 科學知識普及會, 1922, p. 137.
7) 立花敏明, 「連載 新聞製作技術の軌跡 (第7回) 太平洋戦争終結までの新聞製作技術 原稿・写真をどのようにして送ったか (戦前編)」, 『CONPT会報』, 一般社団法人 日本新聞製作技術懇話会, VOL. 40, No. 1, 2016. 1, p. 10-15.
8) 深田一弘, 「連載 新聞製作技術の軌跡 (第29回) 総集編 (後編)」, 『CONPT会報』一般社団法人 日本新聞製作技術懇話会, VOL. 46, No. 6, 2022. 11, p. 3-7.
9) hisako9618「暑いので伝書鳩の話(11)新聞社で働く通信鳩の悲哀」http://blog.livedoor.jp/hisako9618/archives/50017060.html (参照2024-01-05)
10) 優勝歴あるレースハト, 中国人が2億円近くで落札 過去最高額 https://www.afpbb.com/articles/-/3316213 (参照2024-01-05)
11) 松本高等学校山岳部, 『わらぢ』, 原人社, 1927, p. 120.
12) 「われらの青春ここにありき」編集委員会, 『われらの青春ここにありき』, 松本高等学校同窓会, 1978, 挿図, p. 128, 129, 158.
13) 荻上悦子, 『春寂寥 旧制松本高等学校人物誌』, 長野日報社, 2008, p. 330-332,
14) 松本高等学校, 「松本高等学校略図 縮尺千二百分ノ一」『松本高等学校一覧』, 1923.

15）松本高等学校,「設計図索引」,年代不明.
16）松本高等学校編,『落成記念寫真帖』,1922.
17）柳沢孝夫編;窪田雅之 監修・解説,「松本高等学校　鳩舎」『信州松本絵葉書集成』,書肆秋櫻舎,2009.
18）「傳書鳩試験」『信濃毎日新聞』1887（明治20）年3月24日,朝刊,2面.
19）「松本高校山岳部の企て　木崎湖畔で伝書鳩」『信濃毎日新聞』1922（大正11）年11月10日,夕刊,2面.
20）「伝書鳩又帰着」「登山に傳書鳩利用」『信濃毎日新聞』1923（大正12）年5月8日,朝刊,3面.
21）「日本アルプスからの傳書鳩　松高校庭に到着」『信濃毎日新聞』1923（大正12）年8月5日,夕刊,2面.
22）記事によっては、「信濃鉄道会社山岳部員」、「信濃山岳会員」の表記あり。
23）「宮の御消息を傳書鳩に托して」『朝日新聞』1923（大正12）年7月24日,朝刊,5面.
24）宮内省,『昭和天皇実録　第三』, 東京書籍,2015,p.689, 895-897.
25）「御自由な青年として　富士山頂の東宮」「鳩通信」「鳩で奏上す」『東京朝日新聞』1923（大正12）年7月27日,朝刊,5面.
26）黒岩比佐子著『伝書鳩　もうひとつのIT』によれば、1922（大正11）年7月27日の摂政宮（昭和天皇）の富士登山を各新聞社が取材していて、このとき、各新聞社の写真部員たちは陸軍の軍用鳩調査委員から鳩を借りて、五合目の小屋の前で撮影したフィルムをそれぞれの鳩に託したとある。そして、フィルムを背負った鳩は中野の鳩舎に戻り、待ち構えていた各新聞社の記者が、そのフィルムをそれぞれの本社へ持ち帰ったのが、鳩による写真輸送が成功して日本の新聞の紙面に載った第一号であるといっている。しかし、同日の『昭和天皇実録』や新聞記事には摂政宮の富士登山についての記録はなく、1923年の同日に記録があることから、「1922年」は「1923年」の誤りであると考えられる。
27）「南アルプスを無事に御踏破　朝香宮殿下台が原にてシャンペンを抜き給ふ」『信濃毎日新聞』1922（大正11）年7月27日,朝刊,2面.
28）「傳書鳩に托して」『信濃毎日新聞』1924（大正13）年7月22日,朝刊,5面.
29）「お〻山の使者　傳書鳩　又新たな功労」『信濃毎日新聞』1933（昭和8）年7月11日,朝刊,5面.
30）三田啓一「アルプスに翔けた小伝令使（その一）－父・三田旭夫の夢と中部山岳鳩協会－」『山と博物館』第43巻　第2号,1998.2,p.2-4.
31）金沢大学医学部山岳部「About us 歴史」
https://kanazawa-daigaku-igakubu-sangakubu.jimdosite.com/about-us/
（参照2023-12-27）
32）矢澤米三郎,『鳥獣虫魚』,古今書院,1927,p.84-88.
33）山と渓谷オンライン「ヤマタイム」

https://www.yamakei-online.com/yk_map/ により検索したもの。

34）赤地汎，「渓間の暁　朝香宮殿下陪従の思い出」『わらぢ』，原人社，1921. p13-15.

35）仮に、伝書鳩を利用したとすると、鳩は電信文を付けて大町に帰ってきたことになる。大内特派員が大町に戻ってきていないのであれば、大町から別の誰かが電話で東京朝日新聞社に電信文を伝えたとも考えることができるが、どちらにしても、鳩舎は大町にあることになるだろう。であるとすれば、誰が大町のどこで飼育した鳩を使ったのかは全く不明である。これについては、矢澤とともにしばしば新聞記事に登場する「信濃鉄道山岳部員」の山口勝について調べる必要があるのではないだろうか。信濃鉄道とは、かつて松本市の松本駅から大町市の信濃大町駅を結ぶ鉄道路線、および同線を所有していた鉄道会社であるため、山口勝が関係している可能性があると考えられる。

＜本文に記した以外の参考文献＞

・暁「フジレキシ：天皇及び後続の富士登山」
https://fujinoyama.blogspot.com/2012/07/Climbing-Mount-Fuji.html（2024-01-11）

・遠藤宏「鳩舎　レース鳩のための小屋」
https://note.com/endo_hiroshi/n/n8c3987321957（参照2024-01-05）

・大磯郷土資料館「大正12年7月27日」
https://www.town.oiso.kanagawa.jp/oisomuseum/kyodoshiryokan/res/100yearsago_oiso/1923/192307/18101.html（2024-01-11）

・兼子昭一郎，「伝書鳩の歴史（戦後新聞写真史-4-スピグラと鳩）」，『新聞研究』日本新聞協会（編），通号388，1983. 11，p. 48-57.

・札幌通運株式会社「富士登山の歴史を知ろう　富士登山の歴史年表」
https://www.clubgets.com/fujitozan/history/（2024-01-11）

・信州大学 大学史資料センター「No. 34　『わらぢ』（松本高等学校山岳部報）」
https://www.shinshu-u.ac.jp/institution/library/archives/news/donation/no34.html
（参照2022-09-14）

・関悟志「戦後75年に際して　収蔵資料から見る戦時下の登山－北アルプスに翔けた“小伝令使”伝書鳩を使った山岳通信－」『山と博物館』第65巻　第3号，2020. 9，p. 4-5.

・総合鳥害対策のパイオニア/エドバンコーポレーション「日本のハトの種類 主な7種の特徴をご紹介！」
https://www.advan-group.co.jp/times/nihon_hato_syurui/　（参照2023-12-15）

・立花敏明，連載第7回「太平洋戦争終結までの新聞製作技術 その7原稿・写真をどのようにして送ったか（戦前編）」2016年1月号（通巻第235号）『新聞製作技術の軌跡』，一般社団法人　日本新聞製作技術懇話会.

・立花敏明，連載第25回「記事原稿をどう送ったか＝戦後編」2020年7月号（通巻第262号）『新聞製作技術の軌跡』，一般社団法人 日本新聞製作技術懇話会.

・立花敏明,連載第26回「遠隔地から写真をどう送ったか＝戦後編」2020年11月号（通巻第264号）『新聞製作技術の軌跡』,一般社団法人 日本新聞製作技術懇話会.
・深田一弘,連載第28回「総集編（前編）」2022年9月号（通巻第275号）『新聞製作技術の軌跡』,一般社団法人 日本新聞製作技術懇話会.
・深田一弘,連載第29回「総集編（後編）」2022年11月号（通巻第276号）『新聞製作技術の軌跡』,一般社団法人 日本新聞製作技術懇話会.
・毎日小学生新聞「伝書鳩の思い なるほドリへ」
https://www.mainichi.co.jp/maisho/workshop/pdf/tenji_4.pdf（参照2024-01-05）
・三宅直人「伝書バトは飛んだ　原稿と写真の使者」
https://cdn.mainichi.jp/vol1/2021/10/14/20211014org00m070001000q/0.pdf?1
（参照2024-01-05）
・山と渓谷オンライン「となりのハト 身近な生きものの知られざる世界」
https://www.yamakei-online.com/yama-ya/group.php?gid=92（参照2023-12-15）
・hisako9618「暑いので伝書鳩の話(16)鳩が運んできたもの」
http://blog.livedoor.jp/hisako9618/archives/50036061.html（参照2024-01-05）
・NTT DIGITAL MUSEUM「1890年（明治23年）東京横浜で電話開通（日本の電話創業）」
https://park.org/Japan/NTT/MUSEUM/html_ht/HT890010_j.html（参照2024-01-05）
・shumishan「ガルテン日和　カワラバト（原種）」
http://shumishan.blog.fc2.com/blog-entry-2228.html（2024-01-15）